

歯科における実習および研修に関する一考察

丹沢 秀樹

歯科における卒前実習、卒後研修、専門研修、生涯研修に関して、その目的・意義、研修内容、研修指導体制などを整理してみました。

	卒前実習	臨床研修	専門研修	生涯研修
目的・意義	社会人および医療人としての自覚と誇りに目覚めさせ、希望に満ちた歯科医師としての生涯をおくるための知識・技能・人格の基礎形成。	一般的な診療において頻繁に関わる疾患等に適切に対応できるよう基本的な診療能力を身につける。	専門医、認定医、さらには指導医などの資格習得を通じて、各分野の専門家としての診療・研究能力を習得する。	実際のそれぞれの診療現場に必要な専門知識の継続的習得。
研修内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 歯科医学とその周辺領域医学の、実習を通じての理解（基本的考え方と EBM 等の検索能力の習得）。 ・ 患者に対する医療人としての心構えと面接・診療態度、および問診技術の習得。 ・ 一口腔単位での診療・治療計画の立案と実行。 ・ 各歯科治療技術の学問的な理解と基本的手技の習得。 ・ 高頻度治療に関しては、実際に自分で治療する自験例が最低数必要（minimum requirement） ・ シミュレーション実習も必要。 ・ 介助とは、単なる見学やバキューム補助だけではなく、セメントや印象材の練和、石膏注入 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実際の診療に必要な学問的裏付け(EBM 等)を行い、自己学習を行う態度・技能の習得。 ・ 様々な人格を有する患者に対する医療人としての診療態度と対応能力の習得。 ・ 全身的既往歴や、現在治療中疾患の把握と対処法の習得。 ・ カルテや診療記録の重要性の理解と作成能力の習得。 ・ 各歯科治療技術、特に、高頻度治療技術の修練。 ・ 高頻度治療に関しては、最低限の自験例数が必要である。 ・ この場合の介助には、見学は入れるべきではなく、歯科治療への具体的な参加を意味する。 ・ 保険診療の理解。 ・ 歯科医師の社会的責任と誇り 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 医学全体、あるいは歯科・口腔領域全体における各専門分野の診療・研究の位置づけと果たすべき役割を考察する能力の育成。 ・ 専門分野の学問的思考能力、研究能力の習得。 ・ 専門分野における診療能力の習得とさらなる研鑽。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学・同窓会の歯科診療技術講習会。 ・ 歯科医師会生涯研修事業。 ・ 研究グループによる研究会 ・ 保険改定講習。 ・ 大学・講座などの研修会 <p>◎全身管理に関する講習会等はあるが、習得に必要な on the job training のセンターがほとんどない点に問題がある。</p>

	<p>による模型作成など。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際の人を対象とした治療行為を通じた、歯科医師の社会的責任と誇りの自覚を促す。(解剖実習と同様な意義) 	<p>の自覚を育成する。</p>		
研修指導体制	歯学部	研修指定機関等	医局・講座、大学院など、高度専門研究・診療組織	大学、大学同窓会、歯科医師会、研究会など
特に、全身管理に関する事項	<p>全身管理に関しては、医学総論や各論による医科授業、有病者歯科などの歯科授業、さらには救急法（ベーシックコース）実習などがある。</p> <p>歯科麻酔学は周術期管理であり、必ずしも一般歯科治療時における全身管理をカバーするものではないことに注意が必要であり、「有病者歯科学」などの授業が必要と考える。</p>	<p>全身管理に関しては、on the job training でのみ習得可能であり、卒業研修期間は時間的と研修指導体制に制約があり、必要性の理解は必須であるが、習得は困難と考える。あくまでも、講義や見学を主体とした「理解」を目的とする。</p> <p>救急法に関しては、ベーシックコースは必須と考える。</p>	<p>全身管理に関しては、各指導機関（医局、講座、大学院）による研修体制の連携で補完すべきである。</p> <p>研修内容としては、救急法実習、麻酔科研修、ICU 研修などがあるが、実際にはこれらの研修は限られた条件の患者しか対象としていない点に注意が必要である。たとえば、麻酔に関しては周術期管理でしかない。慢性疾患や老人などの予備能力が低下し、継続的な治療を受けている患者の状態の把握する臨床力は on the job training でのみ取得可能である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単なる見学ではなく、実際に急性期、あるいは慢性期を問わず、バックグラウンドのある患者の歯科治療チームへの参加が必要。 	<p>◎全身管理に関する講習会等はあるが、習得に必要な on the job training のセンターが不足している。</p> <p>例：千葉大学の生涯研修講座「歯科医師のためのがん研修コース」では、歯科医師が包括的がんセンターである臨床腫瘍部において医師とともに診療をし、oncology conference への参加により、全身の複数領域における患者管理・治療の実際を理解することができる。(月 6 千円余必要)</p>